

近年建売住宅の間取りにみる変化の兆しとその検証 —福井市都市圏におけるケーススタディ—

Verification on Sign of Change at the Floor Plan of Ready-Built House in Recent Years
- A case study in Fukui urban area -

○栗原知子^{*1}、袁偉^{*2}、桜井康宏^{*3}

AWAHARA Tomoko, WEI Yuan, SAKURAI Yasuhiro

“Type of passing through the public room” (pass through LDK to reach the private room of second floor from the entrance) increase rapidly take the place of “type of independent path” (not pass through LDK) at ready-built house in recent years. In this paper verified the difference of housing consciousness and living style of residents of two types by questionnaire survey to the residents in the ready-built houses built in Fukui urban area in recent years. Difference of housing consciousness of two types appear to the selection reason and the valued factor of house. Difference of living style of two types appear to the frequency and the time of “study and play of children” in LDK.

キーワード：福井市、建売住宅、動線形式、住様式、住意識

Keywords: Fukui, ready-built house, traffic line form, living style, housing consciousness

1. 研究の背景・目的・方法

少子高齢化に加えて人口減少社会への転換が進み、また一方では「個人の自立」「家族の分解」「生活の社会化」傾向などが複合的に進行しつつある現代、「個人・家族・社会の関係」に新たな視点を導入する設計事例や関連研究が多く登場している^{注1)}。一方、新聞紙上広告等にも商品化住宅についても、これまでの画一化傾向^{注2)}から若干の「変化の兆し（新たな動き）」が現れているように推察される。そこで筆者らは、福井市都市圏の新聞紙上広告に掲載された「平面図掲載の戸建新築物件」を対象とし、「1 階室構成」の樹状図的整理（図 1^{注3)}）によって画一化傾向を再確認しながら、「変化の兆し」と思われる特性を以下のように整理した^{注4)}。

①新築建売住宅の 1 階室構成（図 2）は、この四半世紀の間に「小さな公室 DK」に「続き間」等の多様な和室をもつ伝統的タイプから徐々にではあるが大きく変化し、「大きな公室 LDK^{注5)}」に「和室 1 室」をもつタイプ、中でも、「独立和室（LDK から独立した和室）」ではなく「一体和室（LDK からのみアクセスできる和室）」や「両用和室（LDK と廊下の両方からアクセスできる和室）」を

1 室もつタイプに収斂化し、和室をもたない「公室のみ」のタイプも登場し始めている。この間、図 3a にみるように「分節 LDK（「L・DK」「LD・K」のように空間的に分節される LDK）」から「一体 LDK（ワンルームタイプの LDK）」への移行も進み、「対面キッチン」の普及も顕著となっている。

②このような画一化傾向の中で、2000 年以降の「新たな動き」として、「2F 動線（2 階への動線形式）」における「公室通過型（公室 LDK を通過して 2 階の私室に至るタイプ）」の急増傾向（図 3c）があり、浴室・便所についても公室からアクセスするタイプが急増している。このような「公室を通過する動線形式」は、「公室 LDK での家族の出会い」を重視する姿勢の現れであり、住様式・住意識の側面での「変化の兆し（新たな動き）」とみることができる。

以上のような背景と経緯をふまえて、本論文は、この「変化の兆し（新たな動き）」が「需要側のニーズ」を反映するものかどうかを検証すること、具体的には「公室通過型」と従来の「動線独立型（公室を通過せずに玄関から階段経由で 2 階の私室に至るタイプ^{注6)}）」を対比し

*1 福井大学教育地域科学部 助教 修士・工学

*2 福井大学大学院工学研究科、博士後期課程、修士・工学

*3 福井大学大学院工学研究科、教授、工博

Assistant Prof., Univ. of Fukui, M. Eng.

Graduate school of Eng., Univ. of Fukui, M. Eng

Prof., Graduate School of Eng., Univ. of Fukui, Dr. Eng.

ながら、「公室通過型」の住様式・住意識に自覚的な「変化の兆し（新たな動き）」がみられるかどうか、しかも居住者自身が入居前から価値指向性であるかどうかを検証することを目的とするものである。調査対象は、2003年度以降の新聞紙上広告の中から折込広告^{注7)}も参照して「所在地」と「間取り」を確実に把握できるものを抽出したものであり、有効回収数は「公室通過型」57件、「動線独立型」140件の合計197件である。調査は調査

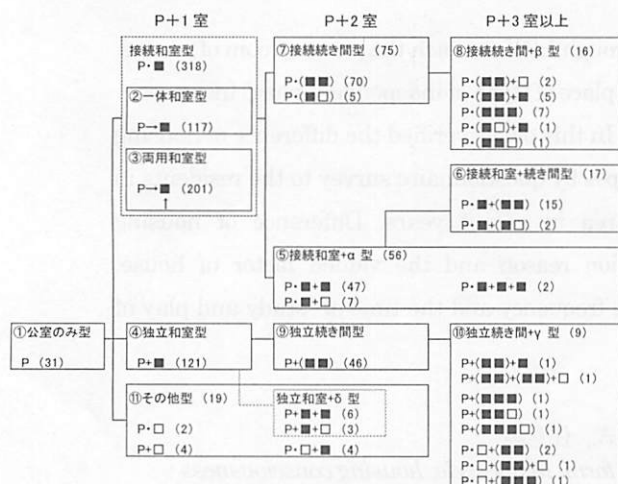


図 1. 1 階室構成の樹状図 (福井)

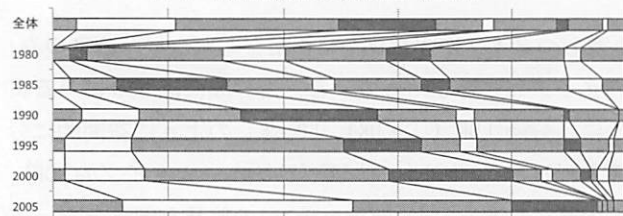


図 2. 1 階室構成の推移 (福井)

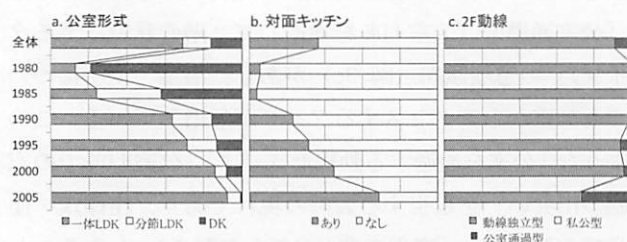


図3. 公室および動線形式の推移（福井）

員の訪問アンケート形式によるものであり、実施期間は2010年11月～2011年1月である。

なお、本研究が新聞紙上広告等を分析対象とした意図は、広告情報が「供給側の戦略」と「需要側のニーズ」という二面性を持ち、「世相」を反映するものと考えられることであり、鈴木成文による「住まいにおける計画と文化^{注8)}」の観点からいえば「文化」の側から世相の一端に焦点を当てることである。中でも「変化の兆し」という意味では、やはり鈴木成文によって「一般の受け入れるところとはならなかった」と評される戦前の『居間中心型』を想起させる間取りが、近年の世相の中で目立ちつつある（一般に受け入れられつつある）ことを検証することが本論文の目的である。その意味では、同様の先行研究として、全国の新聞折込広告等における『居間中心型住宅』の普及動向とその特性を明らかにした鈴木義弘等の研究^{注9)}がある。

2. 対象住戸と世帯の概要

2-1. 立地別にみた住戸と世帯の概要 (図4)

①対象住戸の立地は、大きく「中心市街地（福井市の既成市街地中心部^{注10)}」22%、「新市街地（福井市の市街化区域内新市街地）」52%、「その他（他市町市街地および田園部）」26%に分けられる。

②住戸の概要(図 4a~e)をみると、住宅面積は中心市街地≧新市街地>その他の順(1 階室構成の「両用和室型」「独立和室型」の割合も同順)であるが、公室通過型は新市街地で最も高く、また、公室面積も新市街地で最も広がっている。

③世帯の概要(図 4f-j)をみると、家族人数が中心市街地>新市街地>その他の順であり、中心市街地では入居時期が古く世帯主年齢もやや高い。これに対して新市街地では「C-9(長子年齢9歳以下の核家族)」の割合がとくに高くなっている^{注11)}。

2-2. 動線形式別にみた住戸の概要 (図5)

①図 5ab より、公室通過型では新市街地の割合が高いの

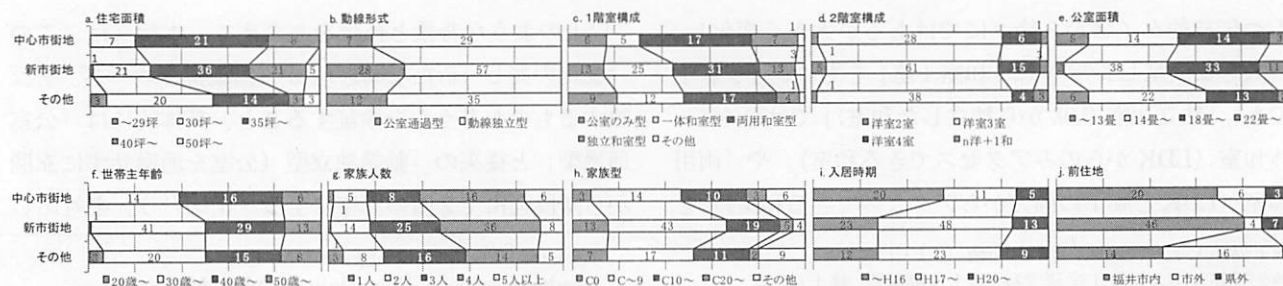


図 4. 立地別にみた住戸・世帯の概要

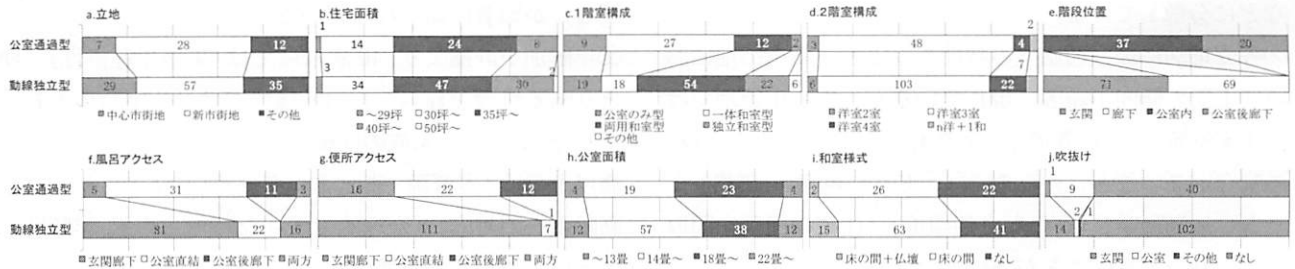


図 5. 住戸の概要

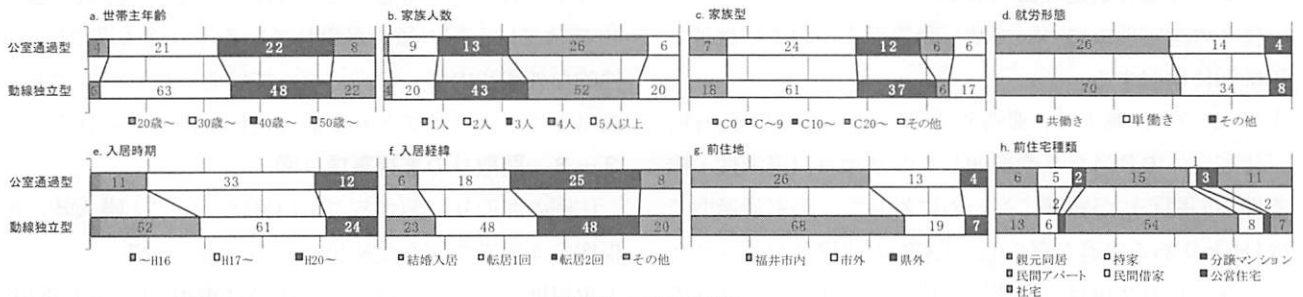


図 6. 世帯の概要

に対して、動線独立型ではそれ以外の割合が相対的に高く、住宅面積も広いものがやや目立っている。

②1階室構成(図5c)については、公室通過型では「一体和室型」54%を中心として「両用和室型」「公室のみ型」の3タイプではほぼ全数であるのに対して、動線独立型では「両用和室型」45%を中心に「独立和室型」や「その他(和室1室タイプ以外のタイプ)」を含めて相対的に分散傾向となっている。

③2階室構成は(図5d)は、いずれも「洋室3室」タイプが大半であるが、動線独立型はやや分散している。

④階段位置(図5e)については、動線独立型では「玄関」と「(玄関から続く)廊下」であるのに対して、公室通過型では「公室内(リビング階段)」と「公室後廊下(公室通過後の廊下やホール)」となっている。

⑤風呂や便所へのアクセス(図5fg)については、動線独立型では「(玄関から続く)廊下」が70~90%を占めるのに対して、公室通過型では「公室直結」「公室後廊下」が合わせて70~80%となっている。

⑥「公室面積」(図5h)は14~21畳程度が大半であるが、18畳以上の割合は公室通過型にやや多くなっている。

⑦和室を有するものについてその様式(図4i)をみると、いずれも「床の間あり」が65%であるが、公室通過型の残りは「床の間なし」であるのに対して、動線独立型では「床の間+仏壇」も10%以上を占めている。

⑧「吹抜け」の保有率(図5j)は20%程度で、公室通過型でやや高いが、その所在場所は、公室通過型では「居間」、動線独立型では「玄関」が大半となっている。

2-3. 動線形式別にみた世帯の概要(図6)

①家族構成等(図6a~d)をみると、世帯主年齢は30~40歳代、家族人数は3~4人、家族型は10歳前後の子供をもつ核家族が大半であり、共働き世帯が約60%を占めるなど、動線形式による大きな違いはみられない。

②一方、入居経緯等(図6e~h)をみると、公室通過型の方が入居時期が新しく、転居回数が多く、市外転入者の割合が高いなど、動線形式による違いがみられ、前住宅種類についても、動線独立型では「民間アパート」「民間借家」に集中しているのに対して、公室通過型では「社宅」「持家」「公営住宅」等に分散している。

3. 住宅購入時の姿勢

3-1. 土地の選定理由(表1注12))

土地の選定理由については様々な要素が関係しているが、ここでは動線形式別および立地別に検討する。

①表1の全体欄より、動線独立型では「実家や親戚への利便性」「通勤通学の利便性」など、利便性に対する関心が極めて強いのにに対して、公室通過型では「小中学校などの利便性」以外の利便性に対する関心は低下し、「住宅の面積や間取り」「外観やデザイン」など、住宅そのものへの関心が極めて高くなっている。

②立地別小計欄より、中心市街地では「通勤通学」「買い物」「小中学校」の利便性、新市街地では「買い物」「小中学校」の利便性に加えて「住宅の面積や間取り」への関心が高いのに対して、その他では「住宅の面積や間取り」に加えて「実家や親戚」「良好な自然環境」「価格」

などに分散している。

③各立地別に公室通過型の特性をみると、新市街地において上記の傾向が顕著に現れているが、中心市街地では「実家や親戚」「通勤通学」よりも「買い物」「小中学校」の割合が高いこと、その他では「実家や親戚」「価格」よりも「通勤通学」「良好な自然環境」「住宅の面積や間取り」の割合が高いことが特性となっている。

3-2. 住宅の選定理由 (表 2)

住宅の選定理由については、動線形式別および世帯主年齢別に検討する。

①表 2 の全体欄より、動線独立型では「価格や経済性」「住宅全体の日当たりや風通し」の 2 項目（経済性・機能性への関心）が顕著に高いのに対して、公室通過型では「ゆとりある快適な暮らし」「家族の団欒やコミュニケーション」の 2 項目（機能性を越えた生活の豊かさへの

表 1. 土地の選定理由

立地別・動線形式別	全体			中心市街地			新市街地			その他		
	合計	公室通過	動線独立	合計	公室通過	動線独立	合計	公室通過	動線独立	合計	公室通過	動線独立
(母数)	197	57	140	36	7	29	85	28	57	47	12	35
実家や親戚への利便性	27%	19%	30%	25%	14%	28%	22%	11%	28%	33%	33%	40%
通勤通学の利便性	16%	11%	18%	14%	38%	13%	11%	14%	9%	17%	6%	6%
買い物の利便性	10%	9%	10%	11%	29%	7%	16%	7%	14%	2%	0%	3%
小中学校など教育施設の利便性	11%	12%	10%	17%	43%	10%	11%	11%	2%	0%	3%	3%
医療・保健・福祉施設の利便性	1%	2%	1%	0%	0%	0%	1%	0%	2%	0%	0%	0%
良好な自然環境	5%	4%	5%	3%	0%	3%	4%	0%	5%	13%	17%	9%
良好な土地柄や近隣関係	5%	5%	4%	3%	0%	3%	6%	11%	4%	2%	0%	3%
宅地の面積や形状	4%	2%	4%	0%	0%	4%	4%	4%	4%	0%	6%	6%
住宅の面積や間取り	11%	18%	8%	6%	0%	7%	11%	21%	9%	15%	25%	11%
設備機器や内装	1%	2%	1%	0%	0%	0%	2%	4%	2%	0%	0%	0%
外観やデザイン	2%	7%	0%	0%	0%	0%	2%	7%	0%	2%	8%	0%
価格	4%	2%	5%	0%	0%	0%	4%	0%	5%	9%	0%	11%
その他	6%	9%	4%	3%	0%	3%	7%	14%	4%	6%	0%	9%

表 2. 住宅の選定理由

世帯主年齢別・動線形式別	全体			～39歳			40歳～			50歳～		
	合計	公室通過	動線独立	合計	公室通過	動線独立	合計	公室通過	動線独立	合計	公室通過	動線独立
(母数)	192	57	135	92	25	67	70	22	48	27	8	19
耐震・耐火などの防災性	6%	4%	7%	7%	4%	7%	4%	0%	6%	7%	13%	5%
省資源・省エネルギー	5%	4%	5%	5%	4%	6%	1%	0%	2%	11%	13%	11%
バリアフリーなど高齢化への対応	5%	4%	5%	3%	0%	4%	3%	0%	4%	13%	13%	11%
住宅全体の日当たりや風通し	18%	12%	21%	17%	8%	21%	22%	23%	23%	11%	0%	16%
個性的な外観や内装	4%	7%	2%	3%	12%	0%	3%	0%	4%	7%	13%	5%
合理的で便利な暮らし	9%	9%	10%	11%	8%	12%	6%	5%	6%	10%	25%	11%
ゆとりある快適な暮らし	13%	23%	9%	15%	20%	13%	32%	4%	4%	0%	0%	5%
家族それぞれのプライバシー	1%	0%	1%	0%	0%	0%	1%	0%	2%	4%	0%	5%
家族の団欒やコミュニケーション	12%	19%	9%	0%	24%	3%	10%	23%	17%	7%	0%	11%
近所の人との付き合い	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
維持管理しやすいこと	4%	2%	4%	1%	0%	1%	7%	5%	8%	4%	0%	5%
価格や経済性	21%	16%	23%	26%	16%	30%	17%	14%	19%	15%	25%	11%
その他	3%	2%	3%	2%	4%	1%	3%	0%	4%	4%	0%	5%



図 7. 間取りの重視事項

関心) が顕著に高くなっている。

②年齢別小計欄より、40 歳未満では「価格や経済性」「ゆとりある快適な暮らし」、40 歳代では「住宅全体の日当たりや風通し」「家族の団欒やコミュニケーション」、50 歳以上では「省資源・省エネルギー」「バリアフリーなど高齢化への対応」「合理的で便利な暮らし」と、年齢層によって主要な関心が変化している。

③各年齢層別に公室通過型の特性をみると、40 歳未満や 40 歳代では上記の傾向が現れている（40 歳未満では「個性的な外観や内装」も高くなっている）のに対して、50 歳以上では両タイプとも多様で逆転傾向もみられる。

3-3. 間取りの重視事項 (図 7)

住宅の間取りに関する 15 項目について、購入時の重視度を 4 段階で問うた結果が図 7a～o である。

①重視度がとくに高い項目（「大いに重視」と「少し重視」との合計が 75%以上の項目）は「a. 日当たりや風通し」≥「g. LDK の広さ・形式」>「h. LD と K の位置関係」≥「f. 収納の広さ・形式」の順であり、いずれも動線形式による大きな違いはみられない。

②動線独立型に比して公室通過型での重視度が顕著に高い項目は「e. 階段の位置・形式」と「j. LDK と家族居室の行き来やすさ」の 2 項目であり、2 階への動線形式（公室通過型であること）を自覚的に重視している様子が確認できる。

③逆に動線独立型での重視度が顕著に高い項目は「k. 夫婦居室の広さ・形式」と「l. 子供居室の広さ・形式」であり、いずれも個室に関わる項目となっている。

4. 公室 (LDK) での生活実態

続いて、入居後の「公室 LDK」における生活実態を頻度と時間の側面から検討する。

4-1. 公室での家族生活頻度 (図 8)

LDK での生活行為 10 項目について、その頻度を 4 段階で問うた結果が図 8a～j である。

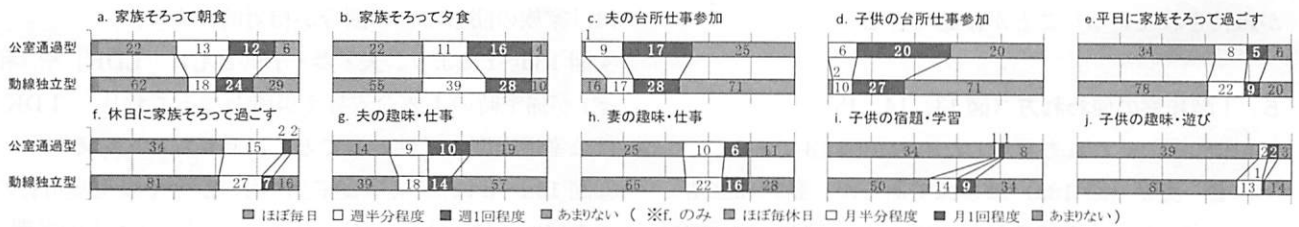


図 8. 公室での家族生活頻度



図 9. 公室での家族生活時間

図 10. 公室に知人を招き入れる頻度

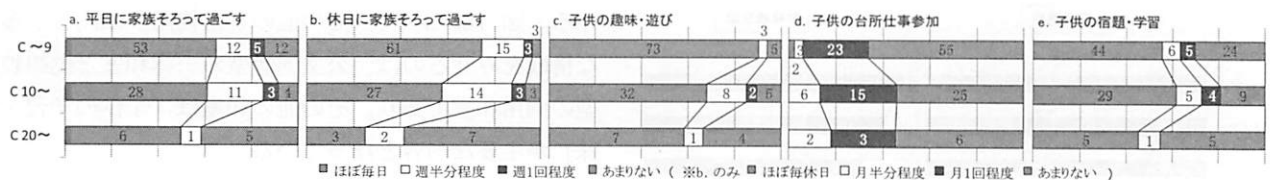


図 11. 家族型別にみた生活頻度

①動線形式による顕著な違いがみられるのは、「d. 子供の台所仕事参加」「i. 子供の宿題・学習」「j. 子供の趣味・遊び」であり、いずれも公室通過型での頻度が顕著に高くなっている。

②「a. 家族そろって朝食」「c. 夫の台所仕事参加」「g. 夫の趣味・仕事」については、動線独立型で「両極分化」の傾向がみられ、「b. 家族そろって夕食」については動線独立型の頻度の方が高くなっている。

4-2. 公室での家族生活時間 (図 9)

上記 LDK での生活行為 10 項目のうち 6 項目について、「LDK で過ごす時間」を問うた結果が図 9a~f である。

①動線形式による顕著な違いがみられるのは「e. 子どもの宿題・学習」であり、「2 時間程度」以上の合計割合は公室通過型 45% > 動線独立型 22% となっている。

②「b. 休日に家族そろって過ごす」や「c. 夫の趣味・仕事」については動線独立型での「両極分化」傾向がみられるが、「a. 平日に家族そろって過ごす」については逆に公室通過型での「両極分化」傾向がみられる。

4-3. 公室に知人を招き入れる頻度 (図 10)

公室 (LDK) に知人を招き入れる頻度 (5 段階) を、知人の種類ごとに示したものが図 10a~d である。

①「a. 近所の人」「c. 妻の知人」「d. 子供の友人」については、公室通過型の頻度が高くなっている。

②「d. 夫の知人」については、「年数回程度」ではある

が動線独立型の頻度の方がやや高くなっている。

4-4. 家族型別にみた生活実態 (図 11、12)

以上のように、動線形式別にみた公室 LDK での生活実態の違いは主として「子供の生活」に現れている。このことをさらに検証するために、核家族の長子年齢別に主要項目の頻度を示したものが図 11a~e、それをさらに動線形式別に示したものが図 12a~d である。

①図 11 より、「a. 平日に家族そろって過ごす」の頻度は「C~9」≒「C10~」>「C20~」の順 (子供の成長した家族での頻度が低い) であり、「家族そろって朝食」「家族そろって夕食」についてもほぼ同様となっている。

②「b. 休日に家族そろって過ごす」「c. 子供の趣味・遊び」の頻度は「C~9」>「C10~」>「C20~」の順 (子供の成長につれて頻度が低くなる) であり、一方、「d. 子供の台所仕事参加」については、差は小さいもののその逆順となっている。

③「e. 子供の宿題・学習」については「C10~」>「C~9」>「C20~」の順 (低学齢児よりも高学齢児の頻度が高い) であり、「子供の友人を LDK に招き入れる」についてもほぼ同様となっている。

④図 12 より、動線独立型では子供の成長段階による頻度の違いが極めて大きい (成長につれて LDK での生活頻度が顕著に低くなる) のに対して、公室通過型ではその変化が極めて小さい (高学齢児でも相対的に高い頻度

が維持されている) ことが確認できる。

5. 1階和室の使われ方 (図13、14、15)

1階和室の使われ方を示したものが図13である。

①和室の使途 (図13a) は多様であるが、動線独立型では「寝室」≥「その他の日常使用」>「客間」>「納戸等」の順であるのに対して、公室通過型では「その他の日常使用」が4割を占めて最も多くなっている。

②寝室として使用の場合の使用者 (図13b) は、いずれも「夫婦+子供」(親子同室) が最も多くなっている。

③「その他の日常使用」の主な用途 (図13c) は、いずれも「子供の学習・趣味」「家族の団らん」を中心としているが、公室通過型では「友人との交流」、動線独立型で

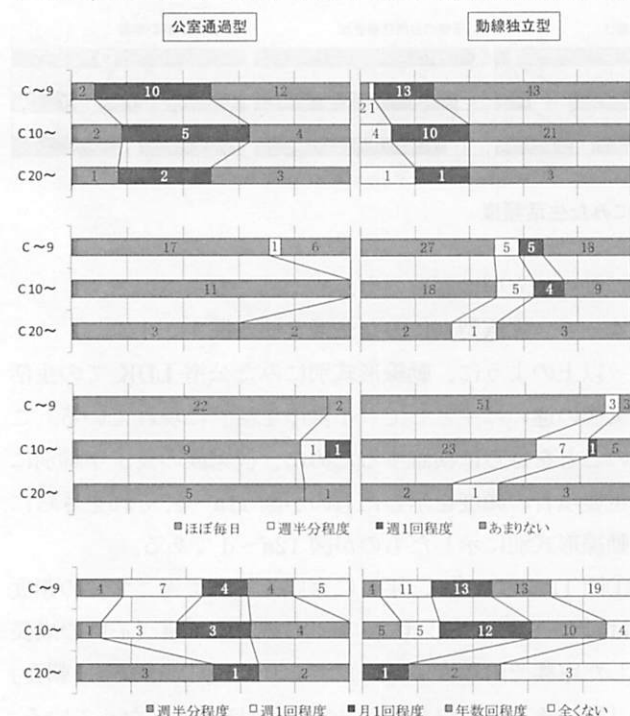


図12. 動線形式別・家族型別にみた生活頻度

は「家族の団らん」の割合が相対的に高い。

④図13d~fにより、夫・妻・子供ともに「LDK」や「和室」が帰宅時の主要な着替え場所となっており、「LDK」は公室通過型の子供と妻でとくに高くなっている。

⑤図14a~dにより、「寝室」使用の割合や寝室使用者の「夫婦+子供(親子同室)」の割合、および「子供の学習・趣味」や「LDKや和室での子供の着替え」の割合が子供の成長につれて大きく減少する傾向が読み取れる。

⑥図15aより、公室通過型・動線独立型のいずれも「寝室(使用)」の割合は独立和室>両用和室>一体和室の順となっている。図15bより、「夫婦+子供」(親子同室)の割合は、公室通過型では独立和室>両用和室>一体和室の順であるのに対して、動線独立型では逆順となっている。図15cより、「その他の日常使用」の内容が多様な構成をみせるのは、公室通過型の一体和室と動線独立型の両用和室であり、その他の和室は「子供の学習・趣味」が主要な内容となっている。

6. 2階居室の使われ方 (図16、17)

①2階居室の使われ方を示したものが図16である。両タイプとも「寝室+複数α室(寝室以外の用途室)」が約30%、「寝室+α室+納戸」が約20%など、寝室以外の用途で多様に使われ、「寝室なし(家族全員が1階和室で就寝)」も1割弱となっている。

②2階α室の用途を示したものが図17である。いずれも多様な使われ方がみられるが、公室通過型では「子供の学習・趣味」「妻の仕事・趣味」「家族の団らん」、動線独立型では「夫の仕事・趣味」「客間」「その他」が相対的に高くなっている。

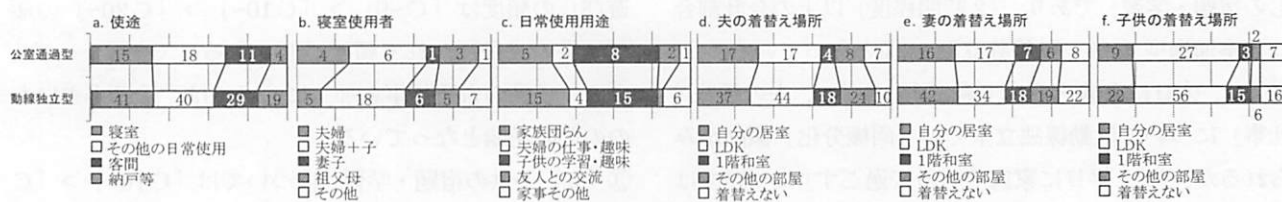


図13. 1階和室の使われ方

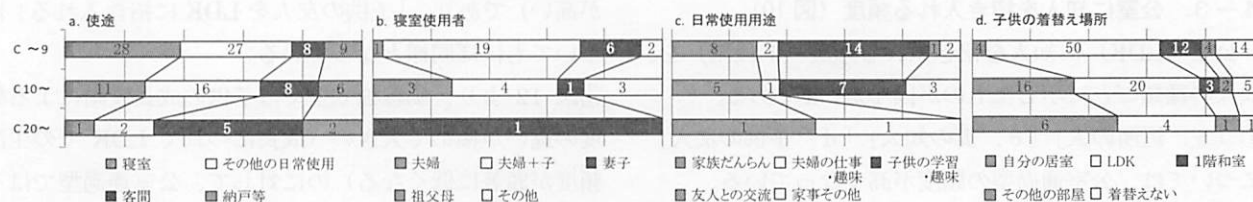


図14. 家族型別にみた1階和室の使われ方

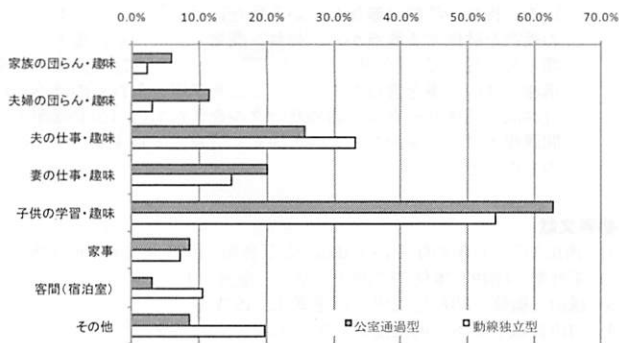
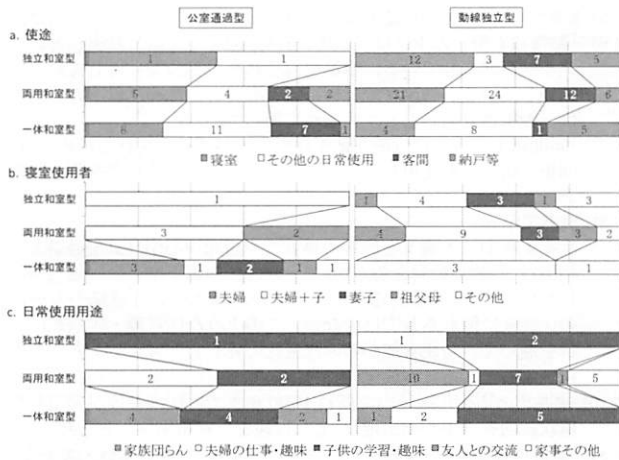


図 17. 2階α室の用途

7. 余暇活動参加実態 (図 18、19)

最後に、住様式・住意識の背景にある生活様式（生活の豊かさに対する姿勢）を捉える意味で、グループ単位での余暇活動への参加実態を検討する^{注12)}。

①余暇活動の種類を6分類した上で、それぞれの参加率を性別に示したものが図 18 である。夫の「職場サークル」参加率は動線独立型の方がやや高いが、他の項目については、程度の差はみられるものの全て公室通過型の参加率の方が高くなっている。

②活動種類別参加率をみると、夫・妻ともに「自主サークル」の役割が大きいが、夫では「職場サークル」、妻では「公共講座」「民間講座」もそれに匹敵している。

③これを「余暇生活の社会化（公共化・商業化・共同化の補完・対立関係）」という観点から、「自主」「共同」「公共」「商業」「非参加」の5分類で再構成し、個人単位での参加率を示したものが図 19 である^{注13)}。個人単位参加

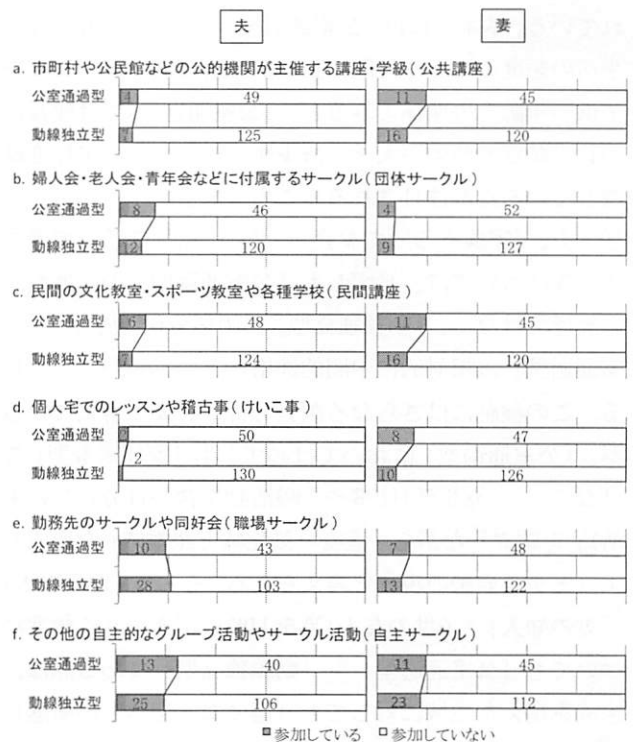


図 18. 余暇活動参加実態

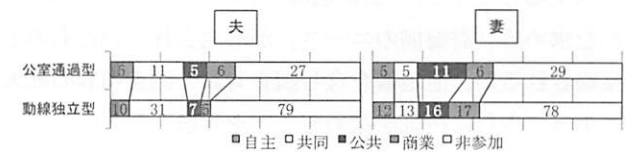


図 19. 余暇活動参加類型

率は、夫では公室通過型 50% > 動線独立型 40%、妻では公室通過型 48% > 動線独立型 43%であり、いずれも公室通過型の方が高くなっている。

④夫は妻に比して「共同」の比重が高いが、公室通過型の参加率の高さは「公共」「商業」の高さによってもたらせている。一方、妻は夫に比して「自主」「共同」「公共」「商業」の4種に分散しているが、公室通過型での参加率の高さは「公共」によってもたらされている。

8. まとめ

①「公室通過型」の居住者は「公室通過型」であることを自覚的に購入しており、その背景には、「立地の利便性」よりも「住宅そのもの」を重視し、「経済性・機能性」を超えた「生活そのものの豊かさ」を重視する住居観や住意識が形成されている様子がうかがわれるが、その姿勢はグループ活動参加率の高さからも裏づけられる。

②このような住居観や住意識の違いは、住様式の面では主として「子供の生活（台所仕事参加やLDKでの宿題・学習および趣味・遊び）」の頻度や時間の違いとなって現

れている。基本的には「公室通過型」における子供のLDK生活の頻度の高さや時間の長さが顕著であるが、これを子供の年齢との関係でみると、「公室通過型」では成長につれて頻度や時間が大きく減少することなく一定程度維持している点が注目されるところである。

③一方、「家族そろって夕食」「平日に家族そろって過ごす」等については、必ずしも「公室通過型」の頻度が高いわけではなく、「動線独立型」に両極分化（従って「公室通過型」は相対的に中間的性格）という傾向がみられる。この検証にはさらなる調査分析が必要と考えているが、「公室通過型」においては必ずしも「家族密着型」ではなく、「自立生活（仕事や余暇活動を含む自分らしい生活）」を確立しながら「適度な気配感と距離感」を形成しようとする姿勢の現れと考えられる。そして「近所の人」「妻の知人」「子供の友人」等をLDKに招き入れる頻度についても「公室通過型」>「動線独立型」である点は、家族を超えた地域に対しても「適度な気配感と距離感」を形成しようとする姿勢の現れと考えられる。

④以上総じてみて、「公室通過型」の急増の背景には、それを求める「需要側のニーズ」が形成されていたものと推察されるが、他地域を含む調査対象と調査内容の拡大によってさらに検証を深めることを課題としたい。

謝辞

本稿をまとめるにあたり福井大学大学院修士・辻井景二氏の多大なご協力をいただいた。記して深甚の謝意を表したい。

注

- 注 1) 参考文献 8)、9)、16)、17)
- 注 2) 鈴木成文は参考文献 5) の中で「現代の状況の中では、住居は好ましい個別性を失って全てが画一化・均一化しつつある」と述べている。また、小林秀樹は参考文献 18) の中で「nLDK」を「今日の間取り」の定型と位置づけ、「多くの論者による説得力ある脱nLDK論とは裏腹に、nLDKの間取りは今日ますます隆盛だ」と述べている。
- 注 3) ここでの系統樹的分類については、古生物学における生物進化の系統樹にヒントを得たものである（井尻正二：新版科学論、大月書店、1977.5）。1階の室構成について、「台所(K)」と連なる一連の洋室を【公室(P)】とした上で、その他の居室【和室：■、洋室：□】との繋がり方と【続き間：(■■) (■■■) (■□) 等で表示】の有無に注目して分類を行った。その他の居室との繋がり方については、Pと接続する関係を「・」、Pとは独立の関係を「+」で表示した（例えば「P・■」は「Pに和室1室が接続」、「P・(■■)」は「Pに和室続き間が接続」を意味する）。図1に示すように、把握した室構成タイプについて、左端の「公室のみ型」から右方向への室数増加にともなう系統発生を樹状図として表した。
- 注 4) 図1～図3には福井地域における四半世紀の変化を示しているが、岩手（東日本住文化圏）・大分（西日本住文化圏）を含めた検討結果を別途報告の予定である（基本的には地域性を越えた共通的傾向が確認できる）。

- 注 5) Kを含む洋室で、10畳未満を「DK」、10畳以上を「LDK」とした。
- 注 6) 「動線独立型」の中には「2階：公室(LDK)、1階：私室」というタイプが含まれている。本稿ではそれを「私公型」として分けて認識しているが、現状では極めて希有であるため、以下の分析では「動線独立型」としてまとめて扱っている。
- 注 7) 「新聞紙上広告」には所在地不詳のものが多く含まれるため、「新聞折込広告」を使用しながら所在地を特定できるものを調査対象とした。
- 注 8) 参考文献 6
- 注 9) 参考文献 11。本論文と同様の趣旨で「居間中心型（公室通過型に相当）」の普及動向を明らかにしつつ、「中廊下型（動線独立型に相当）」との比較検討を行っているが、購入時の意識や入居後の住様式に関わる論議は少ない。このような意識・住様式の分析を通して「居住者側からみた変化の兆し」と言えるかどうかを検証するところに本論文の独自性があるものと考えている。
- 注 10) 福井市の市街化区域内で概ね1990年までに区画整理が完了した環状線内を「中心市街地」、それ以遠を「新市街地」とした。
- 注 11) 家族型分類の「その他」は「単身」「単親」「複合家族」である。
- 注 12) 「土地の選定理由」「住宅の選定理由」については、「主要なもの」のほかに複数回答も得ているが、紙面の都合上ここでは「主要なもの」のみ扱うこととする。
- 注 13) 余暇活動を取り上げる問題意識については、既発表論文「余暇生活のグループ化傾向と住様式・住意識の連関―集会所連施設の必要構造論に関する基礎的研究―」（日本建築学会計画系論文報告集第361号、昭和61年3月）および学位論文「集会所連施設の地域計画に関する研究―余暇生活の社会化傾向に関する生活空間論的研究―」（桜井康宏、京都大学、1990）を参照されたい。
- 注 14) 「余暇生活の社会化」の4分類については以下の手続きに従っている。複数の活動に参加している場合には、「公共化」「商業化」の役割を評価する観点から、公共>商業>共同の順に優先して分類した。従って、[公共：公共講座を含むもの全て][商業：民間講座・けいこ事を含むもの（ただし公共講座を含むものは除く）][共同：団体サークル・職場サークルを含むもの（公共講座・民間講座・けいこ事を含むものを除く）][自主：自主サークルのみのもの]となる。

参考文献

- 西山卯三：日本の住まいⅠⅡⅢ、勁草書房、1975.8、1976.6、1980.10
- 平井聖：図説日本住宅の歴史、学芸出版社、1986.3
- 横山正監修：昭和住宅史、新建築社、1977.9
- 内田荷蔵：日本の近代住宅、鹿島出版会、2005.2
- 鈴木成文：「いえ」と「まち」、鹿島出版会、1988.3
- 鈴木成文：住まいにおける計画と文化（鈴木成文教授東京大学最終講義）、東京大学工学部建築学科高橋研究室、1988.11
- 鈴木成文：五一C白書（住まい学大系101）、住まいの図書館出版局、2006.12
- 鈴木成文・植野千鶴子・山本理顕他：「51C」家族を容れるハコの戦後と現在、平凡社、2004.10
- 篠原聡子、大橋寿美子他：変わる家族と変わる住まい、彰国社、2002.8
- 服部孝生他：平面類型からみた住様式の動向に関する研究(1)、財団法人新住宅普及会住宅建築研究所報No.7、87-116、1980.3
- 鈴木義弘、岡俊江他：居間中心型住宅普及の動向と計画課題に関する研究、住宅総合研究財団研究論文集No.35、143-154、2009.3
- 玉置伸信他：北陸地方における新築・戸建て持ち家住宅に関する研究その1～その2、日本建築学会計画系論文報告集第437号、107-118、1992.7、同第449号、127-140、1993.7
- 玉置伸信他：北陸地方と南九州地方の比較検討その1～その3、日本建築学会計画系論文報告集第453号、113-126、1993.11、同第457号、177-188、1994.3、同第464号、161-170、1994.10
- 玉置伸信他：地方都市における新築・戸建て住宅の空間構成型に関する研究その1～その2、日本建築学会計画系論文報告集第483号、189-198、1996.5、同第449号、153-161、1997.6
- 玉置伸信：住宅事情の地方性研究、住宅建築研究所報第10号、1984.3
- 大橋寿美子他：オープン・コモンをもつ住空間の構成モデルの考察、日本建築学会計画系論文報告集、第577号、17-24、2004.3
- 大橋寿美子他：生活行動に実態からみたオープン・コモンの働きと適応性に関する考察、日本建築学会計画系論文報告集、第587号、25-32、2005.1
- 小林秀樹：nLDKもわるくない、住宅総合研究財団「すまいろん」、第88号、4-6、2008.10